

鹿児島県本土西部・南部方言におけるテ形音韻現象の記述

有元光彦

A Description of *Te*-form Verb Phonological Phenomenon
in Western and Southern Dialects of the *Kagoshima* Mainland

ARIMOTO Mitsuhiko

(Received September 30, 2016)

1. はじめに¹

本稿の目的は、鹿児島県西部・南部の日置市^{ひおき}、南九州市知覧町^{ちらん}、肝属郡南大隅町^{きもつき みなみおおすみ}（佐多^{さた}）方言の動詞に起こる「テ形音韻現象」を記述することにある。

テ形音韻現象とは、有元光彦（2007a, 2007b）等と言うところの特異な形態音韻現象である。テ形音韻現象は次のように定義されている。²

(1) テ形音韻現象の定義：

動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分が、動詞の種類（語幹末分節音の違い）によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

例えば、ある方言△において、〈書いてきた〉を[kakkita]というように、共通語の「テ」に相当する部分にいわゆる促音が現れるとする。一方、〈取ってきた〉は*[tokkita]とは言えず、[tottekita]という[te]が現れる形しか存在しないとする。このように、動詞の種類の違いによって、「テ」「デ」に相当する部分の分布に偏りがある場合、方言△はテ形音韻現象を持つと言う。

本稿では、日置市、知覧町、南大隅町方言のテ形音韻現象を記述するとともに、近隣の方言との関係性を考察する。

2. 記述の方法論

本稿では、初期の生成音韻論(Generative Phonology)の枠組みを利用する。この枠組みでは、基底形 (underlying form) に音韻ルール (phonological rule) が線的 (linear) に適用されることによって、音声形 (phonetic form) が派生される。基底形は、心内辞書 (mental lexicon) に登録されている辞書項目 (lexical item) が形態的操作によって組み合わされたものである。従って、活用形の1つであるテ形の語構成 (基底形) は、「動詞語幹+テ形接辞」となっている。動詞語幹には次のようなものがある。

¹ 本稿での研究の一部は、主に平成26～28年度・独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究 (C) 「九州方言音韻現象の方言崩壊ヒストリーに基づく方言形成シナリオの構築」 (No. 26370540) によるものである。調査においては、各自治体の教育委員会・公民館、及び多くのインフォーマントの方々で大変お世話になった。記して感謝する次第である。

² 「テ形音韻現象」という名称は、以前の拙論では「テ形現象」と呼んでいたものである。有元光彦 (2010) 以後この名称に改めている。内容は変わっていない。

(2) a. 子音語幹動詞：

/kaw/<買う>, /tob/<飛ぶ>, /jom/<読む>, /kas/<貸す>, /kak/<書く>,
/kog/<漕ぐ>, /tor/<取る>, /kat/<勝つ>, /sin/<死ぬ>など

b. 母音語幹動詞：

/mi/<見る>, /oki/<起きる>, /de/<出る>, /uke/<受ける>など

c. 不規則語幹動詞：

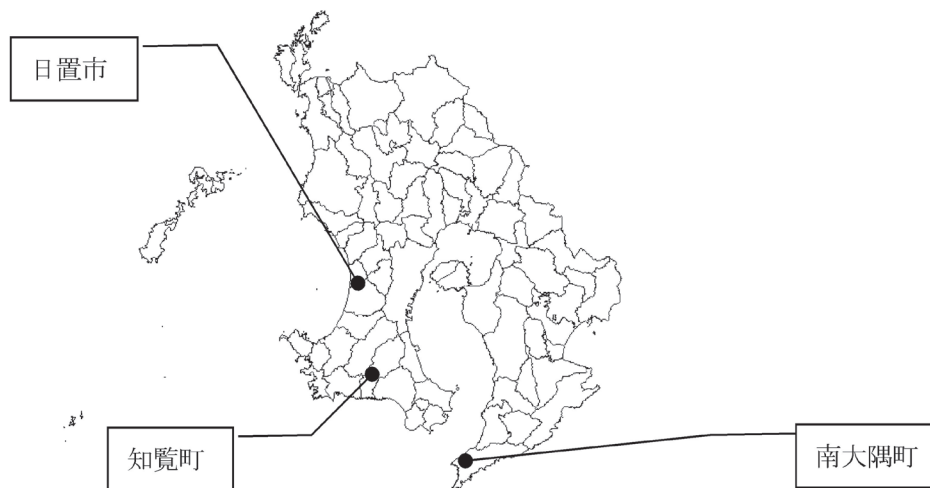
/i/~/it/ (~/itate/) <行く>, /ki/<来る>, /s/<する>

ここでは、テ形に使われる語幹のみを挙げている。子音語幹動詞・母音語幹動詞の各語幹は他の活用形でも共通して使われるが、語幹を複数持つ不規則語幹動詞では活用形によって異なる語幹が使用される。ただ、/itate/という動詞語幹 ([itakkita]<行ってきた>の動詞語幹と仮定している) については、現時点では仮のものである。³ 不規則語幹動詞については、様々な問題が残っているため、言語データは掲載するが、本稿での分析対象外とする。

テ形接辞は、本稿で扱う方言においてははすべて/te/である。また、テ形接辞の直後には様々な単語が続く。例えば、[kita]<(～て)きた>, [kure]<(～て)くれ>等である。

3. データ属性

本稿で挙げるデータは、平成26(2014)年9月のフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域は、鹿児島県日置市、南九州市知覧町、肝属郡南大隅町(佐多)である。おおよその地理的な位置を【図1】に示す。



【図1】調査地点(地図は鹿児島県の一部)

データは音声記号によって表記する。データの適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号*はその音声形が不適格であることを、記号?は少し違和感があることを、それぞれ表す。また、記号%はその音声形の方をよく使うとインフォーマ

³ /itate/という語幹の他にも、/itar/, /itas/といった語幹も考えられる。現時点では明らかになっていないため、仮に/itate/を使用しておく。

ントが判断していることを、記号 \forall はインフォーマントが古い形である（使用しない）と回答していることを、それぞれ表す。また、記号----は調査漏れであることを表す。

また、本稿では語幹末分節音 (stem-final segment) が α である動詞を「 α 語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が/k/である動詞、/kak/<書く>は「k語幹動詞」と呼ぶ。「i₁, e₁語幹動詞」は、語幹が1音節であるi, e語幹動詞を、「i₂, e₂語幹動詞」は、語幹が2音節以上のi, e語幹動詞をそれぞれ表す（インデックス番号が付いていない場合は両方を含む）。

4. 分析

本節では、各方言のテ形音韻現象について、言語データを挙げつつ考察する。

4.1. 日置市方言

本節では、鹿児島県西部の日置市方言のテ形音韻現象について記述する。

まず、インフォーマント2名分(仮に「A氏」「B氏」と呼ぶ)の言語データを【表1】に挙げる。

【表1】日置市方言の動詞テ形

語幹	A氏	B氏	意味
kaw<買う>	kokkita	kokkita	買って来た
tob<飛ぶ>	tokkita	tokkita	飛んできた
	toŋkita	*toŋkita	
jom<読む>	joŋkita	*jokkita joŋkita	読んできた
kas<貸す>	kasekkita	*kakkita kasekkita	貸してきた
kak<書く>	kekita	kekita	書いて来た
kog<漕ぐ>	kokkita	kokkita *kekita	漕いできた
ojog<泳ぐ>	ojokkita	ojokkita *oekita	泳いできた
tor<取る>	tokkita	tokkita	取ってきた
kat<勝つ>	kakkita	kakkita	勝ってきた
sin<死ぬ>	kefiŋkure	kefiŋkure	死んでくれ
mi<見る>	mikkita	mikkita	見て来た
oki<起きる>	okikkita	okikkita	起きて来た
de<出る>	dekkita	dekkita	出て来た
uke<受ける>	ukekkita	ukekkita	受けて来た
i~it<行く>	ikkita	*ikkita	行って来た
itate<行く>	itakkita	itakkita	
ki<来る>	kikkurejo ⁴	kikkuijai ⁵	来てくれ
s<する>	fikkita *sekkita	fikkita *sekkita	してきた

⁴ <来てくれよ>の意である。

⁵ <来てください>の意である。目上の人に対して使用する。

【表1】では、〈貸してきた〉は[kasekkita]ということから、/kase/という別の語幹を用いていることが分かる。また、〈死んでくれ〉において、A氏では[kefiman̩ka]〈死なないか〉、B氏では[kefiman̩]〈死なない〉、[kefime]〈死ね〉という形がそれぞれ現れていることから、〈死ぬ〉の語幹は/kesim/というm語幹動詞である。

【表1】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声語幹末分節音の違いによって分類すると、【表2】のような分布をしている。⁶

【表2】日置市方言の子音・母音語幹動詞の分布

	A氏	B氏
[te], [de]	(なし)	(なし)
促音・撥音	/w, b, m, (s), k, g, r, t, (n), i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ / のとき	/w, b, m, (s), k, g, r, t, (n), i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ / のとき
[ʃi], [ʃi]	(なし)	(なし)

【表2】から分かるように、両インフォーマントとも、「テ」「デ」に相当する部分には促音・撥音しか現れていない。従って、日置市方言は「全体性テ形現象方言（タイプW1方言）」である（cf. 有元光彦（2014a:67））。

次に、母音語幹動詞のr語幹化（ラ行五段化）の現象を観察するために、母音語幹動詞の否定形・過去形を【表3】に挙げる。

【表3】日置市方言の一段動詞の否定形・過去形

	A氏		B氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min miran	mita *mitta	min %miran	mita *mitta
起きる	okin %okiran	okita *okitta	*okin okiran	okita *okitta
出る	den %deran	deta *detta	*den deran	deta *detta
受ける	uken *ukeran	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表3】を見ると分かるように、A氏とB氏の分布状況はほぼ同じである。r語幹化については、i₁, i₂, e₁語幹動詞で起こりやすいと考えられる。従って、/mir/〈見る〉、/okir/〈起きる〉、/der/〈出る〉という語幹が仮定できる。一方、e₂語幹動詞ではr語幹化は起こっていない。従って、〈受ける〉の語幹は/uke/であろう。

⁶ s, n語幹動詞では、別の語幹を用いるため、丸括弧（ ）で表記している。

さて、この r 語幹化がテ形音韻現象に影響を与えるかどうかであるが、全体性テ形現象方言の場合は無関係である。ここでは、母音語幹動詞にも、〈取る〉のような r 語幹動詞にも促音が現れているため、母音語幹動詞が r 語幹化するかどうかは問題ではない。

以上より、テ形接辞の基底形は /te/ としているため、有元光彦 (2015b:303) と同様のルールを暫定的に立てておくことにする。⁷

(3) e 消去ルール：

語幹末分節音が X でない動詞語幹にテ形接辞 /te/ が続く場合、
テ形接辞 /te/ の /e/ を消去せよ。

$$X = \phi$$

4.2. 知覧町方言

本節では、鹿児島県南西部の南九州市知覧町方言のテ形音韻現象について記述する。

まず、インフォーマント 2 名分 (仮に「C氏」「D氏」と呼ぶ) の言語データを【表 4】に挙げる。「D氏」については、実際は 2 名のインフォーマントが同席していたため、【表 4】では「(D-1)」「(D-2)」と区別している。何も書いていない形は、両者ともに現れている。

【表 4】知覧町方言の動詞テ形

語幹	C氏	D氏	意味
kaw<買う>	kokkita	kokkita	買った
tob<飛ぶ>	%tokkita toŋkita	tokkita (D-1) toŋkita (D-2)	飛んできた
jom<読む>	joŋkita	jokkita (D-1) joŋkita (D-2)	読んできた
kas<貸す>	kakkita *kekkitā kasekkita	kasekkita	貸してきた
kak<書く>	kekkitā	kekkitā	書いてきた
kog<漕ぐ>	%kokkita kekkitā	kokkita *kekkitā	漕いできた
tor<取る>	tokkita	tokke:	取ってきた / こい
kat<勝つ>	kakkita	kakkita	勝ってきた
sin<死ぬ>	kefiŋkure	kefiŋkure	死んでくれ
mi<見る>	*mikkita miŋ'ekkita	mikkita mikekkita (D-1)	見てきた
oki<起きる>	okikkita	okikkita	起きてきた

⁷ (3) の記号 ϕ は、ゼロ集合を表す。有元光彦 (2015b:303) で議論しているが、ここにはテクニカルな問題がある。即ち、ここでは音韻ルールを設定しているが、有元光彦 (2007a:124-135) では音韻ルールは立てず、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の基底形として原音素 (archi-phoneme) /Q/ を仮定している。いずれの方法が妥当であるかについては、今後の議論を待つしかない。

de<出る>	dekkita	dekkita	出てきた
uke<受ける>	ukekkita	ukekkita	受けてきた
i~it<行く> itate<行く>	*ikkita itakkita	*ikkita itakkita	行ってきた
ki<来る>	*kikkurenka kifekkure	*kikkure kitemijai	来てくれ/みないか
s<する>	sekkita	*jikkita sekkita	してきた

【表4】では、<貸してきた>は[kasekkita]ということから、/kase/という別の語幹を用いていることが分かる。また、<死んでくれ>は[kefɨŋkure]となっているが、両者とも否定形として[kefiman]<死なない>が現れていることから、<死ぬ>の語幹は/kesim/であると考えられる。

また、[mifekkita],[mikekkita]<見てきた>、[kifekkure]<来てくれ>には特有形が現れている。「テ」「デ」に相当する部分に現れる[fɛ]は、長崎県五島市岐宿町方言や野々切方言の母音語幹動詞にも観察される。有元光彦(2007a:207-210)では、これを「擬似テ形現象の兆し」または「共生タイプ」と捉えているが、いずれであるかは解明できていない。なお、[mikekkita]<見てきた>の場合の[ke]については、現在までの調査では観察されていない形である。今後の調査に譲りたい。

さらに、[mifekkita]<見てきた>のような形には、[fɛ]と[kita]の間に促音が入っている。これは、<見てはきた>のような助詞「は」の類ではないかと考えられる。近隣の鹿児島県枕崎市西白沢方言でも同様に[kitekure]<来てくれ>となっていることから、ひょっとすると地域差があるのかもしれない(cf. 有元光彦(2007a:125))。子音語幹動詞には現れないのか、といった問題があるが、ここでは保留する。

【表4】の子音語幹動詞及び母音語幹動詞の分布をまとめると、【表5】のようになる。

【表5】知覧町方言の子音・母音語幹動詞の分布

	C氏	D氏
[te], [de]	(なし)	(なし)
促音・撥音	/w, b, m, s, k, g, r, t, (n), i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ / のとき	/w, b, m, (s), k, g, r, t, (n), i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ / のとき
[ʃi], [ɕi]	(なし)	(なし)

【表5】から分かるように、両インフォーマントとも、「テ」「デ」に相当する部分には促音・撥音しか現れていない。従って、知覧町方言は、日置市方言と同様、「全体性テ形現象方言(タイプW1方言)」である。

参考として、母音語幹動詞のr語幹化(ラ行五段化)の現象を観察するために、母音語幹動詞の否定形・過去形を【表6】に挙げる。

【表6】知覧町方言の一段動詞の否定形・過去形

	C氏		D氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*mi _N miran	mita *mitta	*mi _N miran	mita *mitta
起きる	*oki _N okiran	*okita okitta	*oki _N okiran	*okita okitta
出る	*de _N deran	deta *detta	*de _N deran	deta *detta
受ける	uken *ukeran	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表6】を見ると分かるように、インフォーマントによる違いはなく、〈見る〉〈起きる〉〈出る〉は r 語幹化して、それぞれ/mir/, /okir/, /der/という語幹になっている。一方、〈受ける〉は r 語幹化せず、/uke/である。しかし、日置市方言と同様、r 語幹化がテ形音韻現象に影響は与えていないようである。

以上から、知覧町方言は、日置市方言と同じルール (3) を持っていると考えられる。

4.3. 南大隅町（佐多）方言

本節では、鹿兒島県南東部の肝属郡南大隅町（佐多）方言のテ形音韻現象について記述する。

まず、インフォーマント2名分（仮に「E氏」「F氏」と呼ぶ）の言語データを【表7】に挙げる。E氏は、今回の調査のインフォーマントである。それに対して、F氏は、平成25(2013)年9月の調査のインフォーマントであり、言語データはすでに有元光彦（2015b:310-311）に掲載している。それを【表7】に再掲している。

【表7】南大隅町（佐多）方言の動詞テ形

語幹	E氏	F氏	意味
kaw〈買う〉	kokkita	ko:tekita kokkita	買った
tob〈飛ぶ〉	tokkita *toŋkita	tokkita ʔtsukkita	飛んできた
jom〈読む〉	jondekita *jokkita *joŋkita	jondekita *joŋkita	読んできた
ogam〈拝む〉	ogandekita *ogaŋkita *ogoŋkita	-----	拝んできた
kas〈貸す〉	kasekkita	kafitekita *kakkita *kasekkita	貸してきた
kak〈書く〉	kekkita *kakkita	kekkita	書いてきた

kog<漕ぐ>	kokkita *kekkita	koidekita *kokkita *kekkita	漕いできた
ojog<泳ぐ>	ojokkita *oekkita	ojoidekita *ojokkita oekkita	泳いできた
tor<取る>	tottekita *tokkita	tottekita *tokkita toʔjaraŋka	取ってきた／やらないか
kat<勝つ>	katttekita *kakkita	katttekita *kakkita kaʔjaraŋka	勝ってきた
sin<死ぬ>	ʃindekure *ʃiŋkure	*ʃiŋkure *ʃiijaraŋka	死んでくれ／やらないか
mi<見る>	mikkita	mittekita *mikkita	見てきた
oki<起きる>	okikkita	okitekita *okikkita	起きてきた
de<出る>	dekkita	detekita *dekkita	出てきた
uke<受ける>	ukekkita	uketekita *ukekkita	受けてきた
sute<捨てる>	-----	sutekkita	
i~it<行く> itate<行く>	*ikkita itakkita	ittekita *ikkita itakkita	行ってきた
ki<来る>	kikkure kitekure	kitemiraŋka *kiʔmiraŋka	来てみないか
s<する>	ʃitekita *ʃikkita *sekkita	ʃitekita *ʃikkita *sekkita	してきた

【表7】では、E氏の<貸してきた>は[kasekkita]であることから、/kase/という別の語幹を用いていることが分かる。また、F氏のg, e₂語幹動詞においては、2音節以上の動詞語幹においてのみ促音が現れていることから、「音節数条件」が関わる(cf. 有元光彦(2007a:211-213))。

【表7】の子音語幹動詞及び母音語幹動詞の分布をまとめると、【表8】のようになる。⁸

⁸ F氏のn語幹動詞ではデータが得られていない。おそらく[ʃindekure]が適格だと思われるが、現時点では確認は取れていない。従って、記号< >で括っておく。

【表8】南大隅町（佐多）方言の子音・母音語幹動詞の分布

	E氏	F氏
[te], [de]	/m, r, t, n/のとき	/m, s, r, t, <n>, i ₁ , i ₂ , e ₁ /のとき
促音	/w, b, (s), k, g, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /のとき	/w, b, k, g, r, t, e ₂ /のとき
[ʃi], [ʃi]	(なし)	(なし)

【表8】から、E氏では、語幹末分節音が/m, r, t, n/のときに[te], [de]が現れるので、「真性テ形現象方言（タイプTD方言）」であることが分かる。一方、F氏は、有元光彦（2015b:320-321）によると、真性テ形現象方言と全体性テ形現象方言の中間段階にある方言タイプ（仮に「タイプTΔ方言」と呼んでいる）と位置付けている。

ここで、母音語幹動詞のr語幹化（ラ行五段化）の現象を観察するために、母音語幹動詞の否定形・過去形を【表9】に挙げる。

【表9】南大隅町（佐多）方言の一段動詞の否定形・過去形

	E氏		F氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min miran	mita *mitta	*min miran *mijan	mita *mitta
起きる	*okin okiran	okita okitta	*okin okiran	okita okitta
出る	*den deran	deta ?detta	denai *den *deran	deta *detta
受ける	uken *ukeran	uketa *uketta	ukenai *uken *ukejan	uketa *uketta
捨てる	-----	-----	sutenai *suten *suteran	suteta *sutetta

【表9】を見ると、インフォーマントによる違いはなく、〈見る〉〈起きる〉〈出る〉はr語幹化して、それぞれ/mir/, /okir/, /der/という語幹になっている。一方、〈受ける〉はr語幹化せず、/uke/である。〈捨てる〉の語幹も、おそらく/sute/であろう。ただ、r語幹化のテ形音韻現象への影響は、F氏でのみ見られる。即ち、F氏では、r語幹化した動詞のテ形では[te]が現れる一方、r語幹化していない動詞のテ形では促音が現れている。ただし、/uke/〈受ける〉は、この例外である。

以上より、各インフォーマントが持っているe消去ルールは、次のように仮定できる。⁹

⁹ ルールにおける弁別素性は、[syl]=syllabic（音節主音性）、[cor]=coronal（舌頂性）、[cont]=continuant

(4) e消去ルール (E氏) :

$$e \rightarrow \phi / \{[-syl, +cor, -cont], [+nas]\}^c] t _ _]$$

(5) e消去ルール (F氏) :

$$e \rightarrow \phi / \{[-syl, +cor, +cont], [+nas]\}^c] t _ _]$$

5. 方言の対照

本節では、第4章で扱った各方言のテ形音韻現象を対照する。【表10】に、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声をまとめる。

【表10】では、記号Q, Nはいわゆる促音、撥音をそれぞれ表す。ただし、2つの形が並べて書かれている場合、それらを併用することを表す。丸括弧 () 付きのものは、別の動詞語幹が用いられることを示す。例えば、/kas/<貸す>は、s語幹動詞ではなく、/kase/というe語幹動詞が用いられている。/sin/<死ぬ>は、n語幹動詞ではなく、/sim/ (正確には /kesim/) というm語幹動詞となっている。さらに、<行く>の動詞語幹は、/i~/it/ではなく、/itate/となっている。また、記号^sは音節数条件が関係することを示す。

【表10】テ形音韻現象の分布

	日置市方言		知覧町方言		南大隅町 (佐多) 方言	
	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏	F氏
kaw<買う>	Q	Q	Q	Q	Q	Q
tob<飛ぶ>	Q, N	Q	Q, N	Q, N	Q	Q
jom<読む>	N	N	N	Q, N	de	de
kas<貸す>	(Q)	(Q)	Q, (Q)	(Q)	(Q)	te
kak<書く>	Q	Q	Q	Q	Q	Q
kog<漕ぐ>	Q	Q	Q	Q	Q	de, Q ^s
tor<取る>	Q	Q	Q	Q	te	te, Q
kat<勝つ>	Q	Q	Q	Q	te	te, Q
sin<死ぬ>	(N)	(N)	(N)	(N)	de	----
mi<見る>	Q	Q	ɿe	Q	Q	te
oki<起きる>	Q	Q	Q	Q	Q	te
de<出る>	Q	Q	Q	Q	Q	te
uke<受ける>	Q	Q	Q	Q	Q	te, Q ^s
i~it<行く>	Q	(Q)	(Q)	(Q)	(Q)	te, (Q)
ki<来る>	Q	Q	ɿe	te	Q	te
s<する>	Q	Q	Q	Q	te	te

ここで判明した各方言の方言タイプは、以下の通りである。

(継続音性), [nas]=nasal (鼻音性) をそれぞれ示す。また、記号^cは補集合 (complement) を表す。さらに、角括弧] は語彙音韻論 (Lexical Phonology) での使用法と同じである (cf. Mohanan (1986))。

- (6) a. 日置市方言： 全体性テ形現象方言（タイプW1方言）
 b. 知覧町方言： 全体性テ形現象方言（タイプW1方言）
 c. 南大隅町（佐多）方言（E氏）： 真性テ形現象方言（タイプTD方言）
 d. 南大隅町（佐多）方言（F氏）： タイプTΔ方言

(6) のような方言タイプの設定の際、今回は記号（ ）で示したものも考慮に入れている。調査で用いた動詞が共通語とは異なる動詞語幹を持っている場合があるが、これはおそらく語彙的 (lexical) な問題であろう。しかし、それに伴って、特定の動詞語幹の種類が存在しなくなる場合、これは体系的 (systematic) な問題である。¹⁰ ただ、この問題は今回の記述には影響を与えない。

さて、改めて (6) を見ると、(6d) を除けば、従来の方言に現れた方言タイプばかりであることが分かる。従って、テ形現象方言全体の方言タイプの分類は、有元光彦 (2014a:64-68) から変わらない。

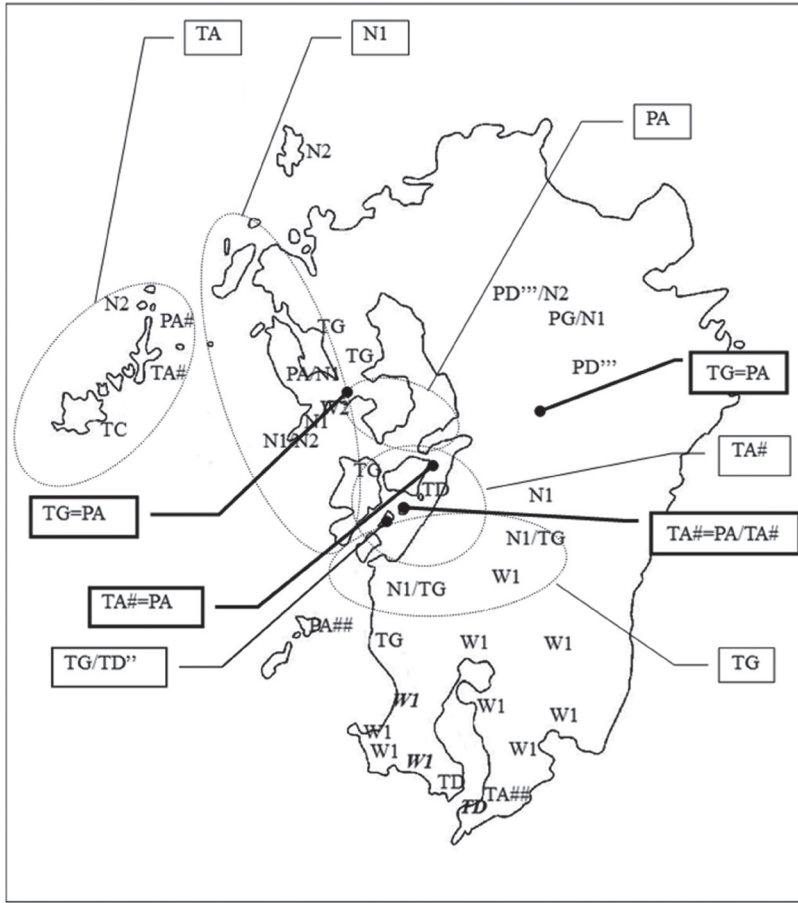
6. 地理的分布

本節では、現時点までに判明しているテ形音韻現象の方言タイプを言語地図上にプロットすることによって、地理的分布を考察する。

先行研究の中で最も新しい言語地図は、有元光彦 (2015c: 200) のものである。これに、本稿で判明した方言タイプを書き込むと、【図2】の斜体太字部分ようになる（ただし、(6d) は除いている）。¹¹ 【図2】では、記号 = は共生タイプを表す。記号 / は両方の方言タイプ（インフォーマントによって異なる方言タイプ）が観察されたことを表す。

¹⁰ 例えば、日置市方言ではs語幹動詞がすべてe語幹動詞になる、というような場合である。しかし、これは、そもそも日置市方言にはs語幹動詞が存在しない、と言った方が正確である。

¹¹ 細かい地理的分布については、有元光彦 (2007a) などの先行研究を参照されたい。特に、長崎県島原半島や熊本県天草地域の分布に関しては、大きくグルーピングしてある。



【図2】テ形音韻現象の地理的分布（2014年9月時点）

【図2】から分かるように、日置市・知覧町方言のタイプW1方言は、鹿児島県一帯に見られるものである。一方、南大隅町（佐多）方言のタイプTD方言は、近隣では薩摩半島の^{いぶすき}指宿市山川岡児ヶ水方言にしか見られない。この分布から想定できることは“海の道”であろう（cf. 有元光彦（2005, 2014b））。現在でも山川港と根占港を結ぶフェリーがあるが、このことから何らかの海路が以前から存在していたことは確かであろう。

さらに、D系列の方言タイプが島嶼部等に存在していることも気になる。例えば、タイプTD, TD'方言が天草地域に分布している。天草地域と鹿児島県本土南端部の間に、何らかの海路が存在していたことは十分予測できる。これも“海の道”の問題である（cf. 有元光彦（2007a:193-199））。

理論的には、鹿児島県本土においてタイプW1方言が大半を占める中で、なぜ別の方言タイプが一部分だけに分布しているのか、しかもなぜそれがタイプTD方言であるのか、という問題が生じる。しかも、この問題が、有元光彦（2015a:43-44）で議論している、「D系列の方言タイプが「非テ形現象化」において果たす理論的な役割」と関連するのであれば、(6d)のタイプTΔ方言の問題とも合わせて検討すべきである（cf. 有元光彦（2015b:320-325））。

さらに、より広い視点での観察も必要となる。【図2】からは、タイプW1方言の北部にタイプTG方言が分布していることが分かる。ここでは、両者がなぜ隣接するのか、という問

題も残る。¹² なぜなら、同様の分布が長崎県本土南部にも見られるからである。ここでは、茂木町方言がタイプW2方言であるのに対して、東彼杵郡東彼杵町及び諫早市小長井町方言はタイプTG方言となっている。しかも両者は隣接している。

この問題に関して、構成的アプローチからは、全体性テ形現象方言は真性テ形現象方言の“擬態種”であるという仮説が提出されている。有元光彦（2007b:48-52）によると、擬態種とは他の種の属性を部分的に模倣する種であるとし、擬似テ形現象方言と全体性テ形現象方言が相当すると仮定している。つまり、真性テ形現象方言と全体性テ形現象方言とは、全く別のカテゴリーではなく、何らかの関係性を持っていると考えている。

構成的アプローチは理論的に熟していないため、音韻ルールレベルからこの問題を見てみる。タイプTG方言（真性テ形現象方言）と全体性テ形現象方言のe消去ルールを次に挙げる。

(7) e消去ルール（タイプTG方言）：

$$e \rightarrow \phi / [-\text{syl}]^c] t _]$$

(8) e消去ルール（全体性テ形現象方言）：

語幹末分節音がXでない動詞語幹にテ形接辞/te/が続く場合、
テ形接辞/te/の/e/を消去せよ。

$$X = \phi$$

(8) は、テクニカルな問題が残っているため、(7) とは異なる定式化をしているが、(7) と同様にe消去ルールを定式化すると、次のようになる。

(9) e消去ルール（全体性テ形現象方言）：

$$e \rightarrow \phi /] t _]$$

ここで(7), (8)を比較すると、(7)の適用環境の一部を消去したものが、(8)の適用環境となっていることが分かる。表面的には(7), (8)は類似しているが、内容的には両者には大きな違いがある。即ち、適用領域が、(7)は非常に狭いが、(8)は非常に広いのである。この違いを、単に真性テ形現象方言から全体性テ形現象方言への非テ形現象化と捉えていいものかどうか、疑問が残る。有元光彦（2015b:324）では、この考え方を採っているが、今後詳細な検討が必要であろう。

7. おわりに

本稿では、鹿児島県の日置市、知覧町、南大隅町方言のテ形音韻現象を主に記述してきた。そして、テ形音韻現象の全体的な地理的分布を分析するとともに、D系列の方言タイプにおける問題点を挙げた。ここでは、共時的な問題だけでなく、非テ形現象化といった通時的な問題についても検証すべきであることを確認した。理論的には、“方言崩壊ヒストリー”と呼ぶ通時的な動態を仮説として提出することが望まれる。

¹² ちなみに、タイプTG方言にはタイプN1方言が隣接している。この両者の隣接関係については、有元光彦（2009:27-30, 2011:180-182）で記述されている。

【参考文献】

- 有元光彦 (2005) 「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」⑤ことばの道—海の道—」『日本語学』 2005年9月号 明治書院 pp.74-82.
- (2007a) 『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』 ひつじ書房.
- (2007b) 『方言研究の構成的アプローチの試み—九州方言の動詞テ形・タ形における形態音韻現象—』 平成16~18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究 (C) (2) 「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」 (No.16520281, 研究代表者: 有元光彦) 研究成果報告書.
- (2009) 「長崎県中南部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第58巻 第1部 pp.15-31.
- (2010) 『テ形音韻現象における構成的アプローチの試み』 平成19~21年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・挑戦的萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」 (No.19652941, 研究代表者: 有元光彦) 研究成果報告書.
- (2011) 「長崎県本土西南部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『九州大学言語学論集』 第32号 pp.167-185.
- (2014a) 『九州方言におけるテ形音韻現象の記述的・構成的研究』 平成23~25年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究 (C) 「九州方言の音韻現象における接触・伝播・受容プロセスに関する研究」 (No.23520554, 研究代表者: 有元光彦) 研究成果報告書.
- (2014b) 「音韻ルールの方言圏論」『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論』 小林隆編 ひつじ書房 pp.189-207.
- (2015a) 「天草諸島方言の多様性—御所浦島方言・獅子島方言の動詞テ形音韻現象—」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第64巻・第1部 pp.31-46.
- (2015b) 「タイプW1方言と方言崩壊—九州南部方言における動詞テ形音韻現象—」『九州大学言語学論集』 第35号 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室編 pp.299-328.
- (2015c) 「共生タイプについて—九州西部方言の動詞におけるテ形音韻現象を対象として—」『方言の研究』 第1号 日本方言研究会編 pp.185-208.
- 日高水穂 (2002) 「言語の体系性と方言地理学」『方言地理学の課題』 馬瀬良雄監修 明治書院 pp.165-178.
- (2008) 「方言形成における「伝播」と「接触」」『方言研究の前衛』 桂書房 pp.425-442.
- 飯豊毅一ほか編 (1983) 『講座方言学9 九州地方の方言』 国書刊行会.
- 井上史雄 (2000) 『東北方言の変遷』 秋山書店.
- Kenstowicz, M. (1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.
- 小林隆 (2004) 『方言学的日本語史の方法』 ひつじ書房.
- (2014) 「方言形成論の到達点と課題 方言圏論を核にして (改定版)」『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論』 小林隆編 ひつじ書房 pp.341-386.
- ほか (2008) 『方言の形成 (シリーズ方言学1)』 岩波書店.

- 九州方言学会編（1991）『九州方言の基礎的研究 改訂版』 風間書房.
- Mohanan, K.P. (1986) *The Theory of Lexical Phonology*. Dordrecht: D.Reidel Publishing Company.
- 大西拓一郎（2008）『現代方言の世界（シリーズ現代日本語の世界6）』 朝倉書店.
- Prince, A. & P. Smolensky (1993) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*.
Technical Report CU-CS-696-95. RuCCS-TR-2.[Published in 2004, Oxford:
Blackwell Publishing]
- 澤村美幸（2011）『日本語方言形成論の視点』 岩波書店.
- 徳川宗賢（1993）『方言地理学の展開』 ひつじ書房.
- 屋名池誠（2009）「〔書評〕有元光彦著『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』」
『日本語の研究』 第5巻3号 pp.132-138.